

第二次世界大戦後の定時制課程発足の経緯に関する研究

米田 俊彦(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

教育社会的領域の格差に関する個人研究として実施してきた。

第二次世界大戦前の旧学制においては、中等段階の教育は中等学校と青年学校の二本立ての、大きな格差を伴った制度になっていた。戦後教育改革で、前期中等教育は中学校、後期中等教育は高等学校に一元化された。高等学校が旧制中等学校を継承したものとされ、青年学校に通っていた層の人たちは中学校卒業後の進学先を失った。青年学校は、男子については義務制であったが、高等学校の発足当初の進学率は5割未満であった。青年学校で学んでいた層の青年の多くが高等学校には進学できず、学校教育における学びの場を失ったことは、全体的な状況としては否定できない事実である。

しかし、青年学校に就学していた層の人たちは行き場を完全に失ったのか。高等学校の定時制課程が、部分的に、あるいは地域によっては青年学校が果たしていた機能を引き継いだ面がなかったのかどうか。この疑問はなお残されている。

高等学校の定時制課程は、市町村によって設置された分校に多く設置された。青年学校も市町村立であった。青年学校の廃止が1948年3月、新制高校の開設が同年4月である。青年学校の生徒の多くがそのまま移籍した分校が多ければ、青年学校の教育が新制高等学校に継承されたと考えることができる。

定時制分校は、ほとんどすべてが現存していない。戦後間もない時期の定時制分校の実情を知る手がかりはきわめて乏しい。ただ、現在の高等学校の沿革史の中には、分校に関する資料や当時の教員・生徒の回想などを収録したものがある。そこで、定時制分校が多数設置され、また比較的充実した高校沿革史が多数刊行されている長野県を事例として選び、長野県の高等学校の沿革史を網羅的に読み、そこに書かれている青年学校と定時制課程との連続性にかかわる記述を拾い出す作業を行った。

この作業は、県立長野図書館（長野市）と財団法人野間教育研究所（東京都文京区）において行った。また、同研究所における共同研究「学校沿革史の研究」における研究活動から多くの知見を得た。そして作業の成果は報告書『新制高等学校定時制課程発足にかか

わる長野県の学校沿革史の記述—青年学校と新制高校定時制課程との連続性をめぐって—』としてまとめることができた（2010年12月刊行）。本報告書の構成は次のとおりである。

はじめに	1
1. 新制高等学校定時制課程の設置と普及	2
2. 青年学校と高等学校定時制課程	5
3. 先行研究	8
4. 長野県の定時制課程設置の概要	12
5. 長野県における定時制課程の分布	17
6. 学校沿革史における定時制（分校）にかかわる記述	19
長野県内の定時制課程発足の経緯に関する各学校沿革史の記述	20
長野市・上水内郡	
下水内郡	
上高井郡	
下高井郡	
更級郡	
埴科郡	
上田市・小県郡	
南佐久郡	
北佐久郡	
松本市・東筑摩郡	
南安曇郡	
北安曇郡	
西筑摩（木曾）郡	
飯田市・下伊那郡	
上伊那郡	
岡谷市・諏訪市・諏訪郡	
むすび	110

長野県の高校の沿革史には、定時制分校発足時の資料が豊富に収録されていた。とりわ

け青年学校の生徒たち自らが、青年学校が廃止されれば学ぶ機会を失うという危機意識を共有して、定時制分校の設置（誘致）運動を行った事例が多数見出された。上記の報告書には、そういった事例に関する記述を多数収録することができた。そういった事例をみる限り、長野県においては青年学校と高等学校が連続的な関係にあったと考えることが可能である。

ただし、長野県内においても定時制分校の設置の度合いには大きな地域差があった。分校が最も普及したのが諏訪（岡谷市・諏訪市・諏訪郡）で、ほとんど（86%）の市町村に分校が設置されたが、1～2割程度の市町村にしか分校が設置されなかった地域も多い（下高井・埴科・北佐久・南安曇・南佐久郡）。

また、定時制分校は小・中学校に併設され、専任教員数がきわめて少ないなど、この点でも青年学校の性格を継承しており、青年学校と中等学校の格差構造が定時制と全日制の関係にそのまま継承された面もまた指摘できることが明らかになった。

今後は、長野県以外の地域に関して同様の調査を実施し、同様の事例を掘り起こすとともに、地域差についても検証することを考えている。